

第十六回

労働の意味

秋にある「おみせやさん」遊びは、年長児が交代で売る人になり、他の園児たちは買つ人になる人気の活動です。その時、牛乳のフタのお金で買い物をするのですが、そのお金は、タタでは渡しません。園内の掃除などの「仕事」をやるか、お家のお手伝いをやるかによって、その労働の対価としてお金を渡します。お金は何でも買える抽象的な数字ではなく、具体的な仕事と結びつけてその価値を認識させるためです。なので子どもは原則としてお金を持たないです。子どもがもつていたらそれは「あぶく銭」だからです。

労働と結び付いてこそお金のおもしろさや重みがわかります。そして、おみせやさん遊びを通して親の苦労をこのように感じてもらえます。

それではなぜ仕事をやるのか。お金のため。お金はお金のために仕事をしなくてはならないというわけではなく、お金のためだけに仕事をしなくてはならないというわけでもありません。

《仕事をしてお金をかかむ》と《お金のために仕事をしなくてはならない》は、同じことを見ても、全然違う考え方です。《仕事をしてお金をかかむ》は、仕事をすることで、お金のためだけに仕事をしなくてはならないという考え方です。《お金のために仕事をしなくてはならない》は、仕事をすることで、お金のためだけに仕事をしなくてはならないという考え方です。

「お金がかかむ」と「お金のために仕事をしなくてはならない」というのは、全然違う考え方です。

「お金がかかむ」と「お金のために仕事をしなくてはならない」というのは、全然違う考え方です。仕事をすることで、お金のためだけに仕事をしなくてはならないという考え方です。仕事をすることで、お金のためだけに仕事をしなくてはならないという考え方です。



境の小学五、六年生に聞いてみました(225人)。「なんで仕事をするといいか」の質問に対して(複数回答可)、多かったのは「生きがい」のため「12%」「生活のため」28%、「同じことを同じ意味として回らせる」40%、それ 외에도上りの54%の回答があったのが「お金のため」でした。細かく見ると、複数回答の中にお金を入れている人が36%、お金のみ答えた人が18%。後者はお金目的ですが、前者はまだどうならぬ可能性をほらんでいます。だから「お金と仕事の関係をしつかり伝えて行かないといけない」と思っています。

フェスティバルの「未来少年コナン」の劇で、仕事するよこの意味を劇の内容にして、セリフにもしました(裏面参照)。セリフを聞いて、それを聞いて、仕事をしたいと思う方が体に入ります。服も米も作らない私が服を着て米を喰つ。そのかわり私は自分で食べきれないほどの魚を喰ふ。このように仕事をやる補い合いが島の暮らしを成り立たせる。この、労働ネットワークコナン、なかなかの仕事をするよこのネットワーク内の役割を担う。労働ネットワークのよこの社会を築く。仕事をやるよこの社会参加するよこのよこです。

フェスティバルの劇は、その縮図のよこのよこに気が付きました。劇の役を担うよこで、劇という小さなネットワーク・未来少年コナンとこの世界に、参加する。その役になるよこは、劇という社会に入らなければならないのです。よこの、あの劇は、労働による社会参加というのを、演じるテーマ、か、演じるよこのよこで実践もつたよこのよこです。

社会のために働くよこの意識はたまたましきつて、理由があるよこ。社会に対して自分を捨てるよこが、求められたよこです。その反対に、仕事の目的は個人の自己実現のよこが、求められました。しかし、その場合も問題はあります。公共心をなくして個人に閉じているよこが、求められました。よこが今の世の風潮のように、しかし、現実をよく見ればわかるはずですが、意識上は自分の満足のためと思いついても、行為はおつては労働ネットワーク参加なのです。自己実現と社会参加は不可分という現実が、今、求められていると思われています。

第一回

お金・労働・消費

バザーが盛況のうちに終わりました。子どもたちも好きなイベントで
おどろきを握って買い物を楽しみました。そんな折りに、ちょっと考え
たいことがあります。

お金って何なの？ お金が大事って言いけむじゅじゅって？ じゅじゅ
仕事ってなにをやるの？

「マネー」が「ゲーム」になり、「フリーター」や「パラサイトシン
グル」がはびこる二十一世紀初頭には。答えがむづかしい問題です。

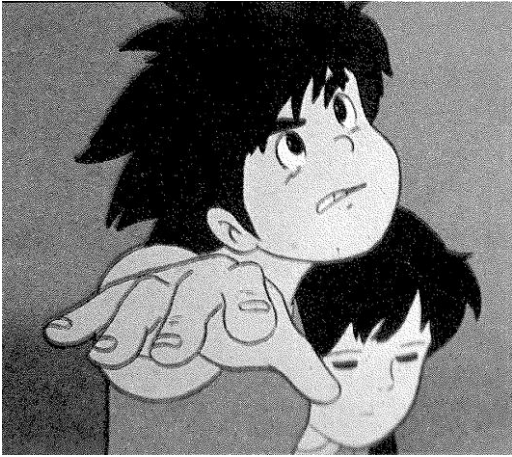
宮崎駿らで作った「未来少年コナン」という作品があります。私が小
学生の頃に、NHKが初めて放映したアニメ
として人気を博しました。主人公のコナンが、
魚を養殖して魚をいけすを見つけて、その魚
おじさんにくっただすねました。

「おじさん一人でおんなに魚を食べるの？」
おじさんは笑って答えました。

「わしはパンは作るん。じかに毎日食ってる。
わしは服は作るん。じかにじゅじゅして着てる。
その代わり、わしは村のみんなが魚を食べるん
おじか漁をしってる。おじかすの魚はわし
のものだが村みんなのものでもあはるん。」

このシンプルな答えには、妙な説得力があります。

いわゆる第一次産業や第二次産業という「もの」を相手にする仕事の
割合が減って、サービスという曖昧なものを売る仕事の割合が増えた社
会では、じゅじゅの単純なじゅじゅがはびこるものかともってあはるん。



モノが見えにくいなる産業構造とともに、お金も抽象化（形がなくな
る）してきます。大判小判は、お金自体に価値があったわけですが、
今の二万円札という紙切れには一万円の価値はありません。そこに印刷
してある数字が大事なのです。それならばお札というモノがなくても
通帳の数字でいい。カードで何でも買える。

お金がたんなる数字になったとき、その裏にある労働は見えなくなっ
ていきます。労働の、つまり身体のももならない幽霊のようなお金が社
会にはびこってきます。

お金マスターが徘徊する社会に、今の子どもたちは産み落とされてま
した。そこでお金を交易に握らねることで、子どもたちもマスター
化していきます。父母の汗水を想像するところできないモンスターに。
服を作らない私が服を着るのは、服の代わりに何かを生産するから
です。「大人になる」「社会に出る」「一人前になる」とは、働
くことで労働ネットワークに組み込まれ、その中に位置を持つ
ことです。

そのネットワークに入っていない子どもたちは、基本的にお
金を持ってない人のハズです。労働の裏付けのないお金は「あび
く銭」、バブリーマネーでもござるんぢやなか。だから子ども
にあまりのお金を持たせる必要はないはず。

「お金があれば何でもおれん」と言っただけですが、お金
があつてじゅじゅのじゅじゅは、じゅじゅのじゅじゅ
じゅを見出し、じゅじゅが大きな関心事になってくるのが、今
私たちが住んでいる「消費社会」です。じゅじゅをひんがくる者へ直
してみなねばなりません。子どもは消費社会でちゃんと育つのかとい
うことを、じゅ。